



(一社)中央酪農会議が酪農教育ファーム活動を制度化して10年以上が経過する。活動に対する評価は教育界などから高まる半面、活動を担う認証牧場数はここ数年約300にとどまる。子どもたちを対象にした食育や命の教育だけでなく、次代

を担う酪農生産者のための人材育成機能として酪農教育ファーム活動が果たす役割は大きい。ここでは「次代を担う人材育成」をキーワードに酪農教育ファーム活動の今後を考える。

多様な受け入れで地域社会と酪農産業への貢献目指す

“生産の場、を第一義に”教育の場、を提供

福島県福島市 ミネロファーム

NPO法人福島農業復興ネットワーク(FAR-Net)が運営する共同型牧場「ミネロファーム」は昨年3月、酪農教育ファームの認証を取得した。同法人は東京電力P 福島第一原発事故により休業を余儀なくされた福島県浜通り地方の酪農家が、国際的乳製品メーカーのダノンと福島県酪農協同組合の支援を受けて2012年に立ち上げた。

1回当たり20人、1時間10分の牧場体験

ミネロファームは事業目標に「集約型酪農経営モデルの構築」と「酪農の多面的機能の発揮」を掲げる。後者の一環に、酪農教育ファーム活動が担う子どものための酪農体験事業と新規就農者のトレーニング事業、学生、社会人のための酪農学習事業(インターシップ)がある。それらの事業を通じて酪農への理解醸成や人材育成を図っている。昨年3月、酪農教育ファームの認証取得

に伴い、前場長の田中一正さん(43)とFAR-Net広報担当の増子裕人さん(48)の2人が活動の推進役・ファシリテーターの資格を得るため研修会に参加した。増子さんは「研修はワークショップ主体。ファシリテーターとしての活動を勉強する上で講義だけの座学よりも効果的だった。参加者との意見交換を通して、学ぶべき点やあらためて気付かされた点も多かった」と研修会を評価する。

認証を取得した昨年は、地元の小学校や幼稚園など6件の牧場体験を受け入れた。今年に入っても申し込みは続き、特に7月は



今年7月、福島市立御山小学校の1年生が牧場体験に訪れた。体験学習は牧場の仕事や牛に関する紙芝居の読み聞かせで始まった(写真提供・ミネロファーム)

福島市立御山小学校の1年生75人の受け入れ対応に追われた。「学校からは一度に全員を受け入れて、と申し込まれたが、こちらの対応力にも限度があり3回に分けてもらった」と増子さん。

牧場体験の受け入れ人数は1回当たり20人程度、最大でも25人と決めており、当日の出勤スタッフ4、5人で対応する。料金は無料。

体験時間は1回当たり1時間10分ほど。牧場の仕事や牛に関する紙芝居の読み聞かせから始める。読み聞かせは牧場スタッフではなく、児童たちをよく知る引率の先生にお願いしているのが特徴だ。その後は子牛との触れ合いと餌やり体験を2班に分かれて、それぞれ20分程度行う。

場長の紺野宏さん(55)特製の六角形のサークルにワラを敷き詰め、2頭ほど入れた子牛と子どもたちが触れ合う。紺野さんは「最初は怖がって子牛に触れない子どもでも、友達に触っている姿



御山小学校の1年生と引率の先生、牧場スタッフの皆さん(写真提供・ミネロファーム)



牛舎内で子どもたちに牛の餌について説明する場長の紺野宏さん(写真提供・ミネロファーム)

を見て、いつの間にかサークルに入ってくるんだ」と相手を崩す。

同ファームは地域交流牧場全国連絡会の会員でもあり、同会と中央酪農会議が東日本大震災被災地で行う出前授業、福島県酪農や県酪農研究連盟などが主催する「もーもスクール」にも参加している。

学校の先生向けにもっと情報発信を

これまでの活動を通して増子さんは「酪農教育ファームの制度自体が十分に認識されているとは言い難い。もーもスクールに参加した学校の先生たちは制度を知っていても、学校として理解しているかは疑問だ。学校の先生向けに情報をもっと発信すべきではないか」と提言する。田中さんは「認証取得後の取り組みを検証する必要がある。ここは観光牧場ではなく生乳生産の場であり、その一部を教育に活用していることを認識しなくては。その上でミネロファームでしかできない取り組みを模索すべき」と指摘する。ミネロファームは年間生乳生産量1,000



酪農教育ファーム活動を推進する紺野宏さん(左)と増子裕人さん

t超のメガファームで、福島原発事故後、生産が低迷している福島酪農再生のけん引役を担っている。増子さんは「仮に毎月2件ずつ定期的に牧場体験を受け入れるとなれば、とてもではないが私一人では対応できない。現場にも負担はかかるし、乳牛の事故発生も心配だ。NPO組織だからといって経営が立ち行かなくなるとは元も子もない。年に数回の受け入れだからこそ取り組みが

きちんと行える」と話す。

次代の生産者の育成・トレーニングの場に

酪農教育ファーム活動の発展版ともいえる新規就農者、学生、社会人のための酪農学習事業を見てみよう。昨年は3大学の学生6人、今年は8月までに2大学の学生2人を実習生として受け入れた。取材時は日本獣医生命科学大学応用生命科



前場長の田中一正さん(中央)の指導を受けて搾乳作業をする鈴木真奈美さん(右)。「搾乳後の乳房消毒作業の補助をして、最後に1頭だけ搾乳させてもらいました。ミルクの取り付けが難しく大変でした」



ミネロファームの皆さん(取材日)。左から長谷川義宗さん(35)、田中一正さん、鈴木真奈美さん(実習生)、米倉光恵さん(30)、今野美智雄さん(53)

ミネロファーム

2012年12月から生乳出荷を開始したミネロファームは、現在総数224頭(うち経産牛142)を飼養、出荷乳量は現在日量3.3t、13年度の出荷乳量は1,208t。スタッフ5人とパートタイマー2人の計7人がローテーションを組んで牧場運営に当たっている。

学部動物科学科2年の鈴木真奈美さん(20)が8日間の実習中で、餌押しや哺乳などの牛舎作業を行っていた。またインターシップとして地元の農業高校の課外学習の受け入れのほか、郡山市のNPO法人と連携したニートや引きこもりの社会復帰支援の一環としての酪農体験も行っている。

今後について紺野さんは「酪農教育ファーム活動にとどまらず、農業をやりたい人を育てる視点で後継者の育成やトレーニングの場としたい」と話し、次代の酪農生産の担い手育成に意欲を示す。増子さんは「受け入れは非常に多岐にわたっており、これからも何らかの形で地域社会、酪農産業に貢献していきたい」と同ファームの事業目標である酪農の多面的機能の発揮に前向きだ。

【文・斎藤 丈士/写真・山下 聡一郎】

認証までの手順(平成26年度スケジュール)

認証牧場	書類提出	現地審査	書類審査 12月	牧場認証
ファシリテーター	書類提出	書類審査 12月	認証研修会 1~2月	ファシリテーター 認証

※認証牧場は「場」、ファシリテーターは「人」の認証です。両方合わせて認証ができますし、ファシリテーターのみの認証も可能です

お申し込み方法
認証牧場認証申請書、ファシリテーター認証申請書に必要事項をご記入の上、お申し込みください。
※申請書類に関しては、酪農教育ファームホームページからダウンロードしていただくか、事務局までお問い合わせください

認証研修会(予定) 1泊2日
会場 札幌 平成27年1月15、16日
東京 平成27年1月29、30日
大阪 平成27年2月19、20日

酪農教育ファーム活動に関するお問い合わせ先
〒101-0044 東京都千代田区錦糸町2-6-1 堀内ビルディング4階
TEL:03-6688-9841 FAX:03-6681-5295
http://www.dairy.co.jp/edf/